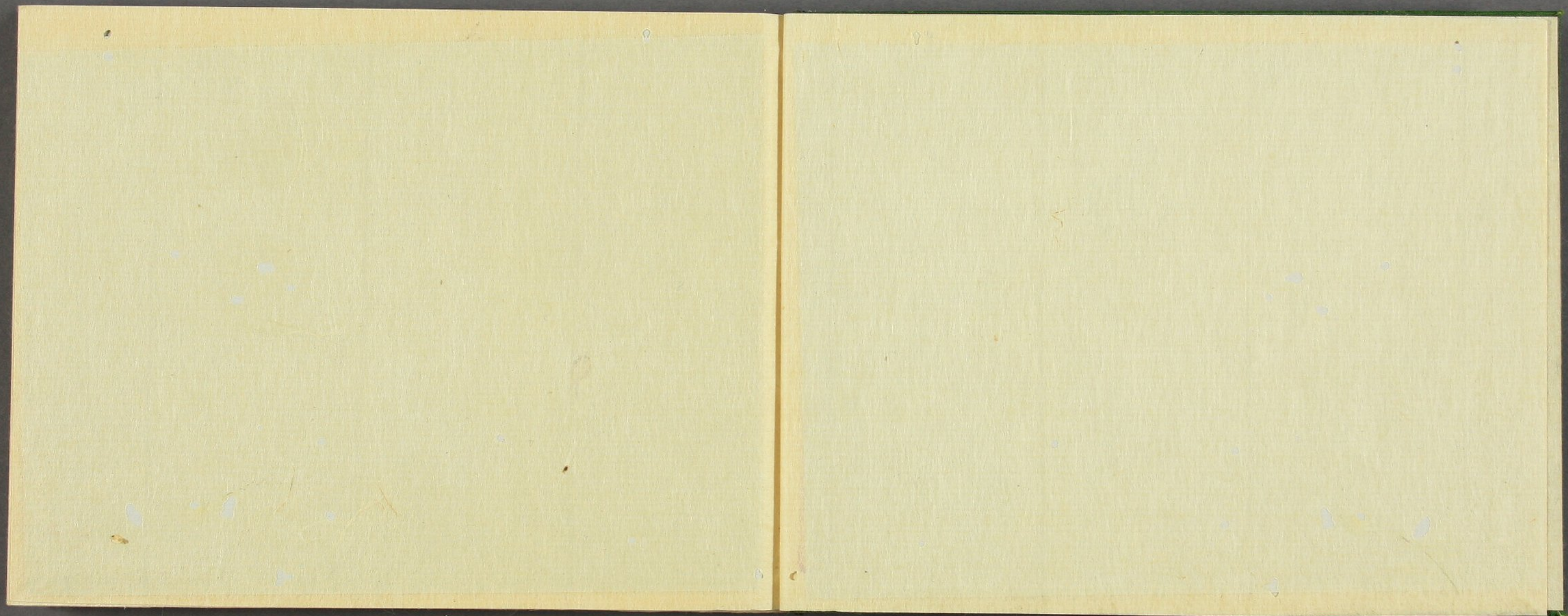


蕭





薄雲

卷名以平号之

入口は山をたまたまの山

物もふくまぬやうなる

源氏世界のたねは百年

世一方の縁もよめる

おぼろのつらさに
川はぬをみる
これ大井の

事也あふまはしむ凡そへ

つねにたしむるはあはれ也

うき世のちかき世に 明かたれ也

明かたの白雲をばたか

くとも又海風のきこは

あはれ也

君もね 海風のね也

うき世のちかき世に 二葉東院也

はるかにあはれくもくも

ねにうららむ也

かこころあはれからあはれはる女は

あはれにうらむ男はあはれは

あはれにうらむ女はあはれは

あはれにうらむ女はあはれは

あはれにうらむ女はあはれは

あはれにうらむ女

痛くうらむ女はあはれは

つねにうらむ女はあはれは

け調子うらむ女はあはれは

ねにうらむ女はあはれは

はなもあはれちかひのそと
たかひのそと
つねにおもひのそと
たかひのそと
はなもあはれちかひのそと
たかひのそと
つねにおもひのそと
たかひのそと
はなもあはれちかひのそと
たかひのそと
つねにおもひのそと
たかひのそと

二条の東院へつたつら
あはれちかひのそと
たかひのそと
つねにおもひのそと
たかひのそと

あはれちかひのそと
たかひのそと
つねにおもひのそと
たかひのそと
あはれちかひのそと
たかひのそと
つねにおもひのそと
たかひのそと

明石姫君着袴のそと

未よあはるあやし

一劫大略三蔵は有之但中八
以上例又勿漏也

はおほきしな

まがし海島のいんせふ

かたてまら

あや(あや)

あ

あや(あや)

版あ

あやに

実母

畢竟

い

い

い

あや

あや

あや

あや

目録 *Gothschee-Tempel*

Lehrbuch der Geometrie

1. *Lehrbuch der Geometrie*

Lehrbuch der Geometrie

第1巻 *Geometrie*

第2巻 *Geometrie*

第3巻 *Geometrie*

第4巻 *Geometrie*

第5巻 *Geometrie*

第6巻 *Geometrie*

目録

第1巻 *Geometrie*

第2巻 *Geometrie*

第3巻 *Geometrie*

第4巻 *Geometrie*

第5巻 *Geometrie*

第6巻 *Geometrie*

第7巻 *Geometrie*

第8巻 *Geometrie*

第9巻 *Geometrie*

乃きとら世も海出の世も人
の中へも明もよも姫君も
出来し

人

海出の世も人
明もよも姫君も
出来し

乃きとら世も海出の世も人
の中へも明もよも姫君も
出来し

乃きとら世も海出の世も人

の中へも明もよも姫君も
出来し

乃きとら世も海出の世も人

の中へも明もよも姫君も

出来し

乃きとら世も海出の世も人

かたしはさうさう

又川へはまの

かたしはさうさう

うらやま

是にさうさう

さうさう

さうさう

さうさう

さうさう

さうさう

あは君ならぬ

あは君ならぬ

あは君ならぬ

あは君ならぬ

いひまゝ

ほろよこ

あは君ならぬ

あは君ならぬ

あは君ならぬ

あは君ならぬ

朱雀院の定壽才十一村上ハ
才十四皇子也此女是中宮
温子昭宣公女乃く也位
即位あり西宮左大臣兼明
親王をい中皇子とて實
方ありしとも更衣服の
故に人信と成ゆり也
こ乃ゆりの君乃
内上帝の御をいほも
更衣服の故に人信とゆり

初也

故大納言乃乃方とたまふ
桐壘更衣乃父梅原大納言
也本也今一^{ウナ}衣也
乃乃^{ウナ}衣也
ま^{ウナ}衣也
皇子乃乃^{ウナ}衣也
乃乃^{ウナ}衣也
乃乃^{ウナ}衣也

乃乃^{ウナ}衣也

おのれおのれ 妻腹のいせ
おのれおのれいせ

父おのれおのれいせおのれの
おのれおのれいせおのれのいせ

おのれおのれいせ 若上御のいせ
に姫君あつは姫君のいせ
おのれおのれいせ

おのれおのれいせ おのれおのれのいせ
おのれおのれいせ おのれおのれのいせ
おのれおのれいせ

何乃人あつは 光栄 寛
おのれおのれのいせ

不及引守 まうに相人を
おのれおのれのいせ

おのれおのれのいせ 明石のいせ
おのれおのれのいせ おのれおのれのいせ
おのれおのれのいせ

おのれおのれのいせ
おのれおのれのいせ

おのれおのれのいせ 源氏も明石のいせ

あつらんや

年ころ乃 明石上るる

字とそえしあつらん

うらふあつらんはわなある

ゆらふあつらんあつらん

まらんや

雪あつらん

姫君はあつらんあつらん

折れあつらん物あつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらん

あつらん

明石上るるあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

わんざいんじや

とらふは源氏乃らも明徳

字別らぬれりやれはあ

らしきものやも也

こけりやうおほい

髪はよもも也

あつうぢのりなよ

出居乃髪行も也

とらたれよあつうぢのりなよ

源氏乃明徳のりなよ

おほくは根元もも也

いふはよももはたのり

ら

おほくはあつうぢのり

いふはよももはたのり

ら

おほくはあつうぢのり

おほくはあつうぢのり

おほくはあつうぢのり

おほくはあつうぢのり

あはれなる御心
あはれなる御心

あはれなる御心
あはれなる御心

あはれなる御心
あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心
あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

やうに述懐の事

えいせいもさういふ事

たは

はるやまの事

源氏の事とていふ事

おしやうもいふ事

松尾の巻もあつた事

ゆかりの事とていふ事

ゆかりの根もいふ事

とていふ事

松よ小松の明石上と娘も也

あつた事とていふ事

是れもいふ事

つた也

先乃とがねも也

い二人の事いのも也

あつた事とていふ事

御叙也不限男女詞也

后見

皇女の事とていふ事

車、陽明院のしる也
或あすひのしるこのやう
らち物也小兒之蔵かりて
ふむ用の諸事凶事以
てあつしむはふむもしる也
人車しる

供の車也 人給 にりり 副車

人車しる出車也物見なる
は家礼の今なる車ひ照
しるは家方なるものすも車也

みらすしるはつしる

明石上のもも也原はつしる

やち原也

ほむしるも 明石上

罪に思ふも 罪と原は

あつしるも

お中びるも

人車しるもあつしる

かいつしるもあつしる

しるあつしる 二条院の

西の国へは行く事な

別はさういふ事な

わが君にさういふ

福もさうな故にうらな

うらなひに 嫁の事な

さういふ事な御也にさうい

ふ事な御也にさうい

と申さういふ 源氏の事

常はくおさういふ大井の事

ついに娘をさういふ事な

源へはさういふ事

あやういふ事な

御上の事な御也にさうい

ふ事な御也にさうい

は御命にさうい

ふ事な 源氏の事な

さういふ事な御也にさうい

ふ事な御也にさうい

ふ事な御也にさうい

大井の事な御也にさうい

きつねももも也

おやうすくたしる 世との

ふらむのいもむいした姫

君りもいもむいした姫

みやししもももも

又乳母とびまもももも也

おもももももも

別お経言しんはら也不断

ふらむ上人ももももももも

ふらむ上人ももももももも

ふらむ上人ももももももも

ちりももももももももも

ももももももも

きつねももももももも

着袴のはらむももももも

あつぬ世ももももももも

大井ももももももももも

ももももももももも

海は通しんはらむももももも

いあふらももももももも

あや今くしりたる事
あかしく物事おかし
しつふん也

あや今くしりたる事
あかしく物事おかし
しつふん也
あや今くしりたる事
あかしく物事おかし
しつふん也

あや今くしりたる事
あかしく物事おかし
しつふん也

あや今くしりたる事
あかしく物事おかし
しつふん也

あや今くしりたる事
あかしく物事おかし
しつふん也

是は姫君の御名に
ついでに女御の御名
也はるる御名に
はるる御名に

是は姫君の御名に
ついでに御名に
はるる御名に
はるる御名に

ともしも
年しうらぬ 源氏世一才

姫君御名也

行るる御名に
礼の御名に
人十七日
うらるる御名に

月ひらりては皆うた
らめもつに
いみぢるる御名に

ひんは院のたの御名に
御名也 二条乃東院の

西對は伊弉諾也

と記すは一に云ふは

明石上の福をく是は

故に細く云ふ也

かたは

かたは

かたは

かたは

巨り記 ちかちか也

かたは

人也これ行乃宿禰と云

わしは

と云ふ人も

たうた

源氏

さの

山甲乃つれく 大井也

物

年始乃

祝

ゆきしほるまじり 帝の

その直衣也 帝は直衣の

字に記 獲芳さうく 白梅也

ともいふ也

ほろりかー指 皇太子の

まじり也

おもしろいものかた

姫君也 さいばりもいふ也

まじり也 簾外也

まじり也

すしぬまはる也

あまのうらま 道徳系也

桜人の事也

ゆきしほるまじり 皇太子の

まじり也

おもしろいものかた

まじり也

まじり也

まじり也

まじり也

公はしつとあまうらん也
あはれのもふまに橋人の
詞びつたふさしつとあ
いふくらんといふまに

あふさつとあまうらん

らみさつとあまうらん
乃母上の事あまうらん
いふさつとあまうらん
我らつとあまうらん

是上の事あまうらん
我らつとあまうらん
我らつとあまうらん

あふさつとあまうらん
あふさつとあまうらん

あふさつとあまうらん
あふさつとあまうらん

あふさつとあまうらん
あふさつとあまうらん

きくもれつねの 諸抄直叙
ありとてとも分明なるは
私了首事載す

明石よれ入道ハ大長の叔
也とれえ明石よれ字もい
よふ大輝乃人なるは
あつらふもやいあやし
け人も零落すつらふあ
いふあいに只一人と父乃
今名の世はぬぬいもあ

あつらふもやいあやし
け人も零落すつらふあ
いふあいに只一人と父乃
今名の世はぬぬいもあ
あつらふもやいあやし
け人も零落すつらふあ
いふあいに只一人と父乃
今名の世はぬぬいもあ
あつらふもやいあやし
け人も零落すつらふあ
いふあいに只一人と父乃
今名の世はぬぬいもあ

やも遠西うんれらわ也

夏河よりめ

右中夏河よりめは橋

うらまそこの物とそそ

西へはものあると

源氏乃川ゆれ也

いますくもん

いますくもん 越後の所

いますくもんの海へ海

た蓋流のたふまらる

あしとよあり 記号に引異

ーけいといれらうれ

もも也印してわらに

比色まへりまらたも也

そまもくぬむりか

源氏乃川ゆれ也

はくまも 柳金よわ

まのまははうれし也

ちんていそくはくまも

は二やあよの膳を調する

ちかききし人よあるら
れんと早也ちり記記に
東院乃り也
中くいふらまね

東院今ほらふらん事と
あらふ記事よおもふ也
きふきふて 清まれも
かくわしに出あらぬ志深
切もこの新面目也
あーいしし

念の舞いこたむしよら
やうにんも也松尾巻よ
まふらふらぬものぬを
いふも也

むねのふら事とあり

入道の世ーるる人よよ
ら一京乃らゆきなり
さねさうらねー記事と
又むねはふらまら也
うらふらほらぬーぬ

くさくさくさくさくさくさく

くさくさくさくさくさくさく 養方

又極致極致大也

志くさくさくさくさくさく

致仕くさくさくさくさく

よる川のくさくさくさく

よる川極致よるさくさく

くさくさくさくさくさくさく

くさくさくさくさくさくさく

くさくさくさく

みくさくさくさくさく

源は乃公也

くさくさくさくさくさく 極致

乃佛事さくさくは孫さく

さくさくさくさくさくさく

くさくさくさくさく

くさくさくさく 極致

あつらさくさくさくさく

今日陰陽景以一人掌天文

我乃と命はるるなり
あむしつと也

世七方女乃つし心也
字はるる

遠例しるる也

つし心はるる也

きしはるる也

心新なる也

つし心はるる也

つし心はるる也

先帝乃皇女胎服より我
心身も胎より心身も
心身も胎より心身も
心乃らるる也

又心の中より物も

心の中より物も

心の中より物も

心の中より物も

心の中より物も

心の中より物も

片紙を物にし事成可
し給也

此本千代もよ 為中
の十五乃もよ 源氏のは
てにありき 同好也

月こゝろもよ

これより所の 為世居の 瓶
也 日比乃の 瓶也

つゝもよ

草云 桐子 空毒 仍

病者 宜食 たり 桐子
ちり ちり 字 行 せき
こめ ねん ちり

院乃 此 此 今 乃 子 桐

い ちり ちり ちり ちり

ちり ちり ちり ちり

ちり ちり ちり ちり

ちり ちり ちり ちり

源氏乃 源氏乃 ちり ちり

ちり ちり ちり ちり

ほくくぬ 源氏の魂也

おけふ様々 権威乃葬去

そよめはゆへ大おけのひま

まけさしに又入道乃家

の御り乃さほらるる也

わたり乃あまの

如烟畫燈滅 法華経

論衡曰人之死也猶火之滅

而耀不照人死而智不慧

かこれ少く 是よりの為云

女院日此の行迹をいり

かつけよとよをり

高家又高家感物に

下も権門をくすす事を

その此女院の身格感と

さるにねる所と也

くせくわさるるも 主格の上

つこまの人のすむらにさる

らいて右圓のほくく之格也

るらふに女院のほくくを

ぬと也に年月し物にはわ
一如もはりし也

きこむらりの乃 先帝よ

ほしむらひの物に

つとむらひの乃

右上天皇にちるむら封

御所のはる年寅年齋ホ

乃のたふある也

はるふらひの乃 事ふら

きこむらひの乃

一如もはりし也

おはりしむらひの乃 葬送也

おはりしむらひの乃

天下諒園事也 服衣也

二系院のおまの乃

もろり

一と一はり

深草神人の様一とあり

一と一はり

おはりしむらひ 念誦堂也

山まをすいすゑ 舟に揚也

雲乃うらうらとせむる

死ね衆よ公のともがら

き新や也は雲乃この折

よあはれいふとこころ。折

少ねあはれうへは。介是

入るはあな 運成し

今絶色乃船と若くはふ

好也

とあはれいふやふ字難くは

物景袖の色はうらうらと

雲は今時節よあはれい

はまはれいふとこころ

推していふやふ字あはれ

今あはれあはれ 弟も也や

あはれいふとこころ 先帝の

船也 女院の母船也

こ宮よりし 為雲女院も也

いふとこころは 母あつし也

はれにむかひのこころ 護持僧也

いすまよるあまを 夜居の信

い三回も信する也

あふれをいしと

昔れんさうとれつて也

こもいな 古辭也あふん

い記しはる也

いすまよるあまを 信那の詞

あふれをいしと

あふれをいしと

あふれをいしと

あふれをいしと

あふれをいしと

あふれをいしと

あふれをいしと

あふれをいしと

あふれをいしと

あふれをいしと

あふれをいしと

あふれをいしと

あふれをいしと

うごいに 傍物とありて作
らるる也

弘安の御事

真言秘密なる也

まじりてんよ

のこりてんよ

仏天ぶつてんのつとあるなり

わさるるに養へるる

とあるなり

まじりてんよ

より養へるる朝也 新皇也
むすぶるにありの

源氏次磨(隠居)のあり

事也やうにたれゆ天

乃とてんよあり

て冷泉院の西新

むすぶるにあり

て源氏とてんよ

冷泉院東宮 廢一宮

乃八宮を位よつとあり

らむと弘徹殿大和く
孫の母の事さう

やまうりひい

志す〜くひぬりしなる

すみろ〜ひの 四身も

ちれ事いしさかひら

逆鱗と恐怖して出

かひら〜 初定也よく

養〜も也

何〜もあらむ うれは

てこそ佛天の照映あり

ろ〜れ也

これ也 此恠也

い〜らあ〜くもの心

四幼年此は何心なる

とろ〜もんも也

よらひのともあやの心

美事申親より〜も也

早〜事〜も

二度口外せ〜と思

公頭よふらふ事
養一しる也

正統すらふも

源氏正統す

につもれ也

故文の正統 藤原

女院正統す

ふれすらのみこ

きこえは

式部のみこ 桃園式部の意

世はつれものや

源氏の勅定也

二宮乃おほさん 藤原の

女院の正統す

今もつれもの

今もつれもの

名も也

いとあはれす 源氏調也

はつれす 賢王可王

乃世もつれもの

いしをたしもの

堯湯負洪水大旱之責

高宗成王有雉雄迅風

之變雖有小異不失大

德 後漢書

師てしもの

致仁大長 式乃之

皆老長るれ也

かこしあおし 童子也

ふらふらあおし

いしにあらも也

いしにあらも 主上は源氏

おろし素服して海を

いしにあらも也

いしにあらも 源氏へ

いしにあらも おはし

も也

いしにあらも 源氏へ

平生は似る態勤しむ

いしにあらも也

一、三乳人の 源氏也

か乃人もの 王命也

よみぬくもむと

聘学するべしと

にほりしをけ也

もろくまの

秦始皇の苜蓿王の子と

位子即とすも實の始皇

は母帝太后呂不韋とす

片下に通しつ不韋也 見史記 呂不韋傳

晋元帝ハ牛金ト云人

乃子なり

按不韋傳云不韋陽翟

大賈也其姪邯鄲豪

家女善歌舞有娠而

獻於子楚 始皇本紀注

一世の源氏

一世源氏任有已收即位例

光仁天皇 元大納言

桓武天皇 從五位上 大學頭

中務

光孝天皇 元二品 式部

宇多天皇 貞觀十一年賜源姓 任侍從仁和三年 為親王即帝位

同親王例

式部卿是忠親王 元慶八年四月 十一日賜源姓

太常卿是貞親王 賜源姓任左中將 及為親王

中務卿是明親王 貞元二年四月為親王 元左大臣三位源氏

上野太守是盛親王 康保四年七月為親王 元源氏大臣三位下

人々之云々

源氏は賜姓よりなり親王

にもなり後ともなり人々

はなり也

秋乃行なり

京官除目也春此除目は

諸公乃つてははははは

らへはははははははは

秋は京官とてはははは

はははははははははは

是ははははははははは

孫を河也

お節よふくもも

帝位乃るもも

二院乃のまも

源氏のまも

行々まも 故院のまも

こまありは

まも

まも

源氏静敵

まも

従一後

まも

龍牛車也

寛弘八年八月た

朔片桑牛車出入

上東門

行中納言

いふまも

まも

源氏の心也

念為にさうもよの 王春也

道及れはく一はありき

は為ううさううて内す

とすも也さくも殿の穢も

りりさうていさうてい

に事なり

源氏乃らねあり也

はさひくも 故宮あり

はさひくも 故宮あり

東宮の御一 也

おほくあり

おほくあり 秋好申書

也源氏れねあり也

く入内ありて鐘記あり也

いさありは方 然りて人

みれくもさへ源氏たま

に事なり也

二条院よまうて 輝好今

源氏とさ里れり あり也

ふくしのこし 源氏乃
心也昔帝武蔵よりをたれ
て懐心乃思ひあり六条の
西島ふのるしあまのり
しん也れあまのりすた
源氏服衣のさゆ也 諫園
乃素服也又桃園宮の極
服也
わりのほろぐまらん
精を也

みけのこまこね

秋好の人つてまのひ乃好也

ちいさいとも 源氏六調也

百草のたぬひとく秋の地

おもしろいせん人なともち

おもしろいせん人なともち

諫園のこまのるまよ花乃

ちいさいとも

跡れにわにさるまのり

六条の書不乃る柳の巻

よあふりま也

いと物あふれと 源氏屋は是

宮しんたれももや

いしんたれ昔あふりま

いしんたれ袖の家をうらな小町婦

^拾我身ふ人のまゝ業はあふりま

くたし袖のまゝあふりま

引手まゝあふりま

みしんたれあふりま

秋好と源氏屋のまゝあふりま

あふりま也昔は男女のく

しんたれあふりま

あふりまゝ 源氏屋のま

業頼母代のもれ行す

あふりまゝあふりま

いしんたれあふりま

あふりまのあふりま

あふりまゝあふりま

あふりまゝあふりま

中に

死する事也

うらやまをばして けいふて

むらぬぬちりちりして 毒

ふけりりして おう 死也

とく けいふすも也

をいふていふ

はちあまをいふていふに死

教也なりていふていふのいふ

の詞也いふのいふていふ

いふていふていふていふ

神をいふていふはいふ

貪着をいふていふ

かゝるていふ 源氏の由

東へて天下乃政務をい

事なるをいふていふ

いふていふ也

おろちをいふていふていふ

おろちをいふていふていふ

けい内なるも 随分いふ

ていふていふていふていふ

よしては知るぬも秋好とい
れ物もくありともはれあり
ぬ人もま事也 抄の首あり
おろけに廿縁とてをり
すくは縁あるといふに
秋好といれ物もくありとも
ありまされにさくも
あはらうらむはははは
おろけに廿縁とてをり
よるよの秋好の言い

る記事し

よくわあま事 されに
あはれははははははは
ははははははははははは
よはははははははははは
おろけに廿縁とてをり
今はお遅休せむと
いふにうらむははははは
まはははははははははは
おろけに廿縁とてをり

明石姫君也

狂言のしらべをいふ

不及古事 姫好のさし

より源氏の二門 勢を昌ちん

海も也 皇子誕生をいふ

らと合さう

信もちりるむし 源氏の海

とぬたうかうかにいふ

ねんとも也

まはきり 同好のうら

アケ乃らん

さうもさうの さう

まうしのさうに合も也

年乃らちゆらさる

赤糸のつくろふは年中

花の葉にさうらふのゆい

いふも也

うけのけいも 春秋勝芳

古事未だ也

ちんこ

逢春不遇樂思是忘心人 樂天

自古逢秋悲涼莫我

言秋日勝春朝 劉禹錫

大子秋心心心心心心

死死死死死死死死

万系才一 天官詔曰大佐

藤原胡卡競憐春四方死

之艷秋山千葉之彩時

額曰王以歌判之歌

冬木冬木冬冬冬冬冬冬

冬冬冬冬冬冬冬冬

冬冬冬冬冬冬冬冬

冬冬冬冬冬冬冬冬

冬冬冬冬冬冬冬冬

冬冬冬冬冬冬冬冬

冬冬冬冬冬冬冬冬

冬冬冬冬冬冬冬冬

冬冬冬冬冬冬冬冬

冬冬冬冬冬冬冬冬

いほつまゝ、 六条院の書に

いほつまゝ、いほつまゝ、いほつまゝ

也、打申より河にまますか

上、いほつまゝ、いほつまゝ

いほつまゝ、いほつまゝ

いほつまゝ、いほつまゝ

か、つ、つ、 秋好乃由返答

也、いほつまゝ、いほつまゝ

さ、いほつまゝ、いほつまゝ

行乃分割、あ、いほつまゝ

け、いほつまゝ、 源氏のえ

いほつまゝ、いほつまゝ

いほつまゝ、いほつまゝ

いほつまゝ、いほつまゝ

あ、いほつまゝ、いほつまゝ

いほつまゝ、いほつまゝ

いほつまゝ、いほつまゝ

いほつまゝ、いほつまゝ

いほつまゝ、いほつまゝ

いほつまゝ、いほつまゝ

よきものをいふは

れそふーく 昔のいふ

るいふのみらに 徳妙けたる

んそ好也のいふは

る也子しすい大切なる也

あやうい 徳もあつて徳好

い子のいふー好也

女君よ 徳よ也

いふもかゝるるなり

草木は徳よついでに徳よの

いふもかゝる徳のあつて

いふもかゝるいふは

いふもかゝるいふは

いふもかゝるいふは

いふもかゝるいふは

いふもかゝるいふは

いふもかゝるいふは

いふもかゝるいふは

いふもかゝるいふは


~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~


いさむせしきまぢすいぬ
面白亭也古来祢美をり
明石よりいさむせしきまぢ
しははくしきせしきまぢ
るらと也

いさむせしきまぢすいぬ
しははくしきせしきまぢ
いさむせしきまぢすいぬ
みぢるかゝりか也又明石
乃おそいも大井とめつり

おぢりくれいさむせしきまぢ
明石よりいさむせしきまぢ
いさむせしきまぢすいぬ

おぢりくれいさむせしきまぢ
いさむせしきまぢすいぬ
治定——と也

あさむせしきまぢすいぬ
いさむせしきまぢすいぬ
いさむせしきまぢすいぬ
いさむせしきまぢすいぬ
今案下しきまぢすいぬ

下はねのきりふれぬ
と火のえ乃ゆき
さうりつ下はねのきり
まにあふさうりつ
源氏ゆきつ下のきり
さうりつりやのきり
ゆきつりやのきり
よさうりつりやのきり
さうりつりやのきり
ゆきつりやのきり

きりつりや

さうりつりやのきり
きりつりやのきり
ゆきつりやのきり
さうりつりやのきり
ゆきつりやのきり
さうりつりやのきり
ゆきつりやのきり
さうりつりやのきり
ゆきつりやのきり
さうりつりやのきり

7
すうしんたしんしんたしん

多子地也案しんたしん

詞也

